

\*\*\*\*\*

# 日本語対応手話

\*\*\*\*\*

手話コミュニケーション研究会

伊藤政雄 竹村 茂  
唯野玲子 平美穂子

# 第1章 日本語対応手話とは

## 第1節 「日本語対応手話」の目的と意義

私たちは、文字や音声のある決まった約束のもとに用いることによって日本語を表しています。これと同じように、手話に日本語を表すための約束を与えたものが「日本語対応手話」です。手話と口話で正しく日本語を伝達できるようにすることが、日本語対応手話の大きな目的です。

日本語対応手話を考案することによって次のようなメリットが考えられます。

### (1) 教育の場

- ① 口話と併用しやすい手話となるので、併用することによって、口話だけ、手話だけの時よりも分かりやすくする。また口形のよく似たことばを区別しやすくする。
- ② 日本語を手話で正しく表すことによって、日本語習得をたすける。
- ③ 特定の教科に使われる用語や専門的な用語など、従来の手話では対応しきれなかった単語や表現をカバーし、伝達できる範囲を広げる。

### (2) 社会生活の場

聴覚障害者の社会生活で従来から用いられてきた手話には、日本語の文法によらない表現形式が多くふくまれており、独自の豊かな表現力を持っています。従って、従来の手話と「日本語対応手話」では、それぞれに異なった役割をになうことになると考えています。すなわち従来の手話が日常のコミュニケーションや視覚パフォーマンスのような芸術的分野などにおいてその役割をになうものであるとするならば、「日本語対応手話」はやはり日常のコミュニケーションで用いるほかに、次のような役割を果たすものといえます。

- ① テレビなどの日本語によるマスメディアで使用する。
- ② 大学や研究の場など日本語による専門用語や特殊な用語、表現が要求される分野で使用する。
- ③ その他、日本語に依存する度合の大きい場面で使用する。

以上のようなことから聴覚障害者の社会生活を向上させ、社会参加の可能性を高め、種々の活動を行う機会をつくっていきます。

## 第2節 日本語対応手話の特徴

### I 日本語対応手話の4つの原則

日本語対応手話には、手話の特徴を尊重しながら日本語に対応するため工夫をした結果、従来から用いられてきた手話と比べて、いくつかの特徴がみられるよ

うになりました。

手話と音声言語との違いは、まず音声言語が音声—聴覚という経路をとるのに対し、手話は手指—視覚という経路をとるということがあげられます。音声言語では音を順々に並べることによって意味を表しますが、手話では手の形・位置・動かし方などの要素を同時に示すことができます。

また、手話は音声言語に対し「写像的」といわれます。「写像的」というのは、たとえば、両手の親指と人差指でつくった円の形を上にあげることによって太陽を表すように、ものの形や動きを手指で模写して表すことです。

そのために、手話は音声言語のひとつの単語に対していくつもの形ができたり、意味によっては手指のみで表現しにくいものがある（逆に音声で表現しにくいものが手話では表現しやすいばあいもあります）などの面が指摘されています。

例：「落ちる」というひとつの単語にはいくつかの手話があります。



(試験に)落ちる



(スピードが)落ちる



(名前が)落ちる



(汚れが)落ちる

このように「落ちる」というひとつの単語でも、意味の内容が多様なものは、その意味に応じた形をつくるのが従来の手話のやり方です。

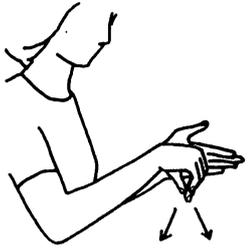
しかし「視覚的・写像的」という性質を上手に利用すれば、生き生きした豊かな表現ができますし、音声言語とは別な意味で伝達力を高めることも可能です。

そこで日本語対应手話を考案するにあたっては、手話の長所を生かしながら正しく日本語に対応できるように工夫しました。基本的には次の4つの原則に基づいています。

#### (1) 一単語一手話の原則

ひとつの単語にいろいろな意味が含まれる場合でも、ひとつの手話で表すことを原則とし、複数の手話で表すことはしません。（ただし、意味の近い複数の単語を一つの手話で表すことはさしつかえないこととします。原則の(3)参照)

例：落ちる



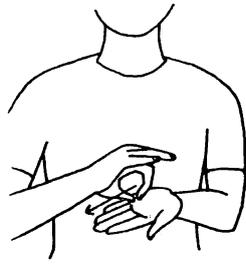
上にあげた「落ちる」の例では、この原則に従って右図のような形で「落ちる」を表します。次の(2)同義語の原則に従って、なるべく「落ちる」という語の持つ意味全体を包含するようにします。

(2) 同義語の原則

その語のもつ意味と手話の形がズれることのないようにします。(従来の手話では手の形が語の意味の一部分しか示していないような場合もみられます)

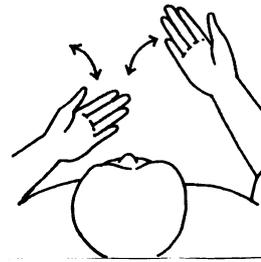
例：「使う」

従来の形



右手が「お金」の手話なので「お金」という意味が加わってしまう

日本語対応手話での形



「人を使う」「頭を使う」などどんな場合の「使う」も表現できる

(3) 相互補完の原則

口形との相互補完ができるようにします。日本語の単語は何万語とありますので、それを全部手話化することはできません。そこで意味の似ている単語を同じ手話で表す場合がありますが、そのようなときは口形によって区別することを原則とします。その結果、手話の読み取りも、読話も、聴覚弁別もいっそう容易になります。

		ホーリツ	法律
		ジョーレー	条例
		キヤク	規約

例：「法律、条例、規約」

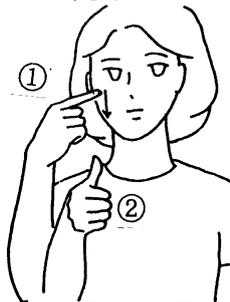
これらは同じ手話を用いますが、口形が違うので区別できます。

#### (4) 動作経済の原則

手指の動きは発話する際の唇の動きに比べてどうしても労力と時間の負担が大きくなりがちなので、ひとつの動作の動きがなるべく小さくなるように工夫します。

例：「父」

従来の形



人差指で頬をなでて、  
親指を前に出す

日本語対応手話での形



親指で頬をなでて、  
そのまま前に出す

以上4つの原則のほかに、手話単語の形がおぼえやすいものであること、従来の手話をできるだけ尊重すること、性や排泄の表現に注意することなどを決めてあります。

## II 日本語対応手話と従来の手話との相違点

これらの原則にしたがって手話を整理していくと、日本語対応手話と従来の手話とのあいだにはいくつかの違いがみられるようになってきます。これらの相違点は、次のようにまとめられます。

### (1) 漢字手話

#### ① 漢字手話の有用性

日本語を手話で正確に表現しようとする場合、1単語に対し、1つの手話が対応するのが望ましいと思われれます。しかし、日本人（成人）の理解語彙数は、平均5万語前後と言われ、その5万語のことごとくに対応した手話を創り出すのはまず不可能ですし、記憶の負担も大変です。そこで、日本語は漢字と仮名の組み合わせによって表記されるという点に着目し、漢字に対応させた手話を創るという方法を考えてみました。

漢字を手話で表すことができれば、いろいろなメリットが生まれます。

まず、日本語は漢字の熟語が非常に多いので、漢字手話を創れば、その漢字手話の組み合わせで、いろいろな漢字の熟語が表せます。例えば、「事」と「物」という漢字手話を組み合わせて「事物」という熟語をつくることにすれば、次に「品物」や「事実」という手話をつくる時に、「事」や「物」の漢字手話が利用できます。

また、日本語の単語ひとつひとつに手話をつくった場合に比べ、漢字手話なら覚える手話の数が少なくてすみますし、手話から漢字を想起し、その漢字から意

味をつかむなら、特に抽象性の高いことばの場合、意味の明確化に役立ちます。

## ② 常用漢字の漢字手話

私たちは現在、常用漢字の漢字手話化の作業を進めています。常用漢字は1945字あります。使用頻度の少ないものは手話化する必要はありませんし、異なる漢字でも意味が近い場合は同形の手話で表せるものもありますから、すべての常用漢字を手話化するというわけではありません。また昔から使用されてきた手話で、そのまま漢字手話として利用できるものも、できるだけ尊重しました。それらを含めて約1600字を試みに漢字手話にしてみました。その全部を紹介することは不可能なので、ここでは漢字手話の例をいくつか紹介します。

## ③ 漢字手話作成の方針

### ア. 原則

- i 1漢字は1手話とします。
- ii 漢字手話の手の形は漢字が示す意味全部を表示するようにします。

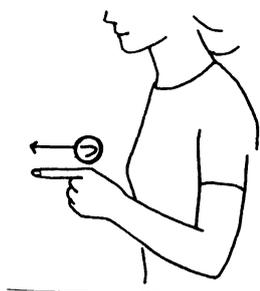
### イ. 例外

- i 指文字を使用する漢字手話は、音読み・訓読みそれぞれに応じて指文字部分を変えて表現します。ただし、音・訓は常用漢字として認められている範囲内とします。
- ii 音と訓の違い・音の違い・訓の違いで漢字の意味を明確に区別できるときは、それぞれ別に手話をつくることもできます。
- iii 二つ以上の漢字が同じ訓読みを持つときは、音訓ともに意味が同じか似ている場合は同じ手話とし、意味がはっきり異なる場合は別の手話とします。

<音読み・訓読みそれぞれを指文字で表現し分ける例>

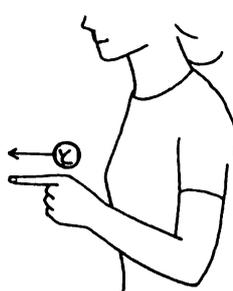
例：「通」

「ツウ」と読む場合



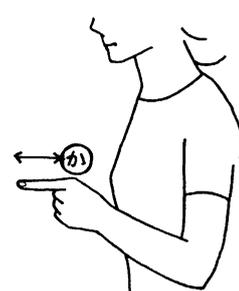
左手人差指の上を  
「ツ」でなぞる

「とおる・とおす」と  
読む場合



「ト」でなぞる

「かよう」と読む  
場合

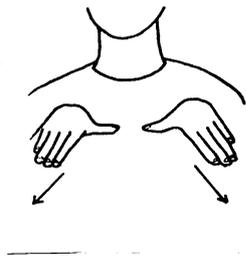


「カ」で往復させる

<音と訓の違い・訓の違いで意味を明確に区別できるので、別の手話をつくる場合>

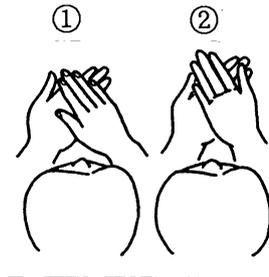
例：「治」

「おさめる・おさまる・ジ・チ」と読む場合



手のひらを下に向けた両手を  
開きながら下へ

「なおる」と読む場合



両手を手のひらを向い合せにして  
交差させて重ね、右手を裏返す

#### ④ 漢字手話の使用方法

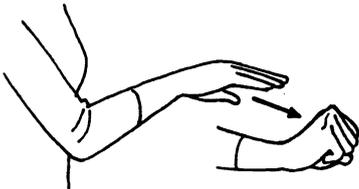
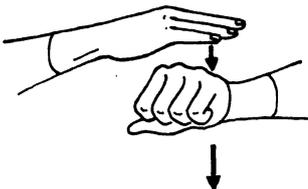
すべての漢字熟語を漢字手話で表すわけではありません。次のような手話のときに、漢字手話で組み合わせるのがよいでしょう。

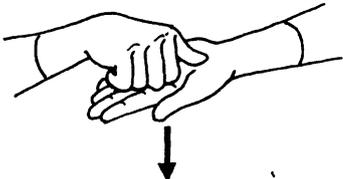
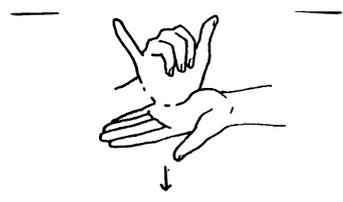
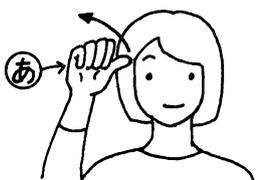
その漢字手話を表す手話がなく、漢字手話の組み合わせでも違和感のないもの

逆に言えば、一語感の強い漢字熟語は漢字手話で表すのではなく、ひとつの新しい手話を考えた方がよいと思います。例えば、「先生」とか「意味」などの語を手話化するときは、「先」と「生」、「意」と「味」の漢字手話の組み合わせでは違和感がありますので、「先生」・「意味」の手話を新しく一語の手話として作成します。

## 漢字手話の例

私たちが作成した漢字手話の一覧表の例を紹介します。常用漢字を音読みで並べた場合の最初の12個を例としてあげてみました。

漢字	音訓	手話図像	動作方法の解説
亜	ア		両手を指文字「あ」の形にして並べ片手を下げて、「準ずる」「次ぐ」の意味を表す。
哀	アイ あわれ あわれむ		手のひらを左胸につけて、「哀悼」の意味を表す。
愛	アイ		左手の甲を右手の手のひらでなでる。「わたしたちの手話5」の「愛」を使う。
悪	アク オ わるい		人さし指で鼻先をなでるように横切らせる。「わたしたちの手話1」の「悪い」を使う。
握	アク にぎる		指先をすぼめるように開いた手を斜め前下へ押し出しながら握る。「わたしたちの手話8」の「把握」の右手だけを使う。
圧	アツ		左手を握り拳にして、右の手のひらで圧力が加わったようにおさえつける。

漢字	音訓	手話図像	動作方法の解説
扱	あつかう		両手の指先を前方に向け、まるみをつけた手のひらを向かいあわせ、交互に上下に動かす。
安	アン		<音読みの場合> 左の手のひらに右手を指文字「あ」の形にして置き、安定するように下へおろす。
	やすい		<訓読みの場合> 左の手のひらに右手指文字「や」をのせ、下へさげる。
暗	アン くらい		手のひらを前に向けた両手を顔の両側に置き、顔の前で交差させる。「わたしたちの手話1」の「暗い」から。
案	アン		指文字「あ」をこめかみにあて、はじくように前へ出す。
以	イ		指先を互い違いに向けた両手の甲をつけあう。
位	イ くらい		左手を手刀の形にして胸の前へ置き、その上を右の手のひらで撫でるように動かし、「地位」の感じと「程度」の感じを含めて表す。

## (2) 指文字結合手話

意味上、同一のカテゴリーに属する語が多数ある時には、左手でカテゴリーを示す手話を、右手で各語の第1音節または第2音節に対応する指文字を用いることで、合理的に表すことができます。左手の手話を「枠」とし、それを右手の指文字で「分化」させるわけです。

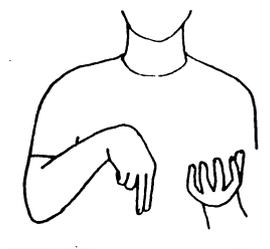
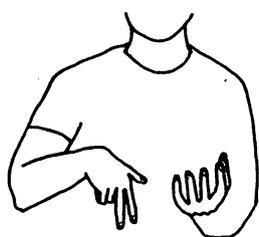
この方法でたくさんの単語を表すことができ、ひとつひとつの語の記憶も容易になります。また動作量もすくなくてすみます。

指文字は混乱の恐れのないときは1音節、口形を考えても混乱の恐れのあるときは2音節以上とします。

例：「すいせん」

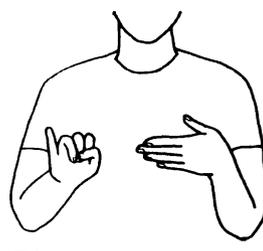
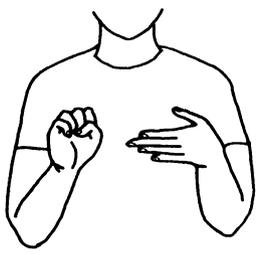
例：「なでしこ」

(花が強く意識される植物名)



例：「サバ」  
(魚類)

例：「いわし」  
(魚類)



次のようなカテゴリーに分類される語は、指文字結合手話で表します。

植物名：花、樹木、草類、野菜、豆類、きのこ類、果物、  
穀類、竹・笹類、藻類

動物名：魚類、鳥類、虫類、蝶・とんぼ類、貝類、哺乳類

薬品名：医薬品、農薬、化粧品、塗料

食品類：酒類、肉類、麺類、調味料、揚げ物

地域：国、都道府県など

その他のカテゴリー：

身体部位、味覚、時代名、トランプ類、色名、宝石類、元素・原子名  
栄養素、和服類、金属類

### (3) 付属語の表現

従来の手話では、日本語の付属語に当たる手話は少なく、表情や手話の空間的配置などによって表すことが多いのですが、日本語対应手話では原則として付属語を正確に表現します。

1 音節の助詞は指文字を用います。

例「は、が、を、に、で、へ、も、――」

2 音節以上の助詞と助動詞は手話をつくります。

例「れる・られる」「から」

詳しいことは、第2章をご覧ください。

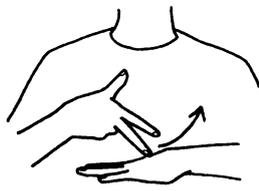
## Ⅲ 文例

次に、(1) 教育の場、(2) 社会生活の場を想定して、それぞれで使用されることが多いと思われる文例を1つずつあげてみます。漢字手話や指文字結合手話などを有効に利用することによって、日本語の文章を正確にわかりやすく表現できることがわかりいただけると思います。

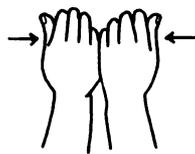
従来の手話は独自の文法を持っているため、その語順は必ずしも日本語と一致していませんでしたが、日本語対应手話では音声語とまったく同じ語順になります。当然ながら口話との併用もしやすくなります。

### (1) 教育の場

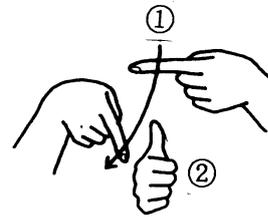
文例：聖徳太子が定めた冠位十二階の制は、徳、仁、礼、信、義、智の6種をそれぞれ大小に分けて十二階としたものです。（高校の日本史より）



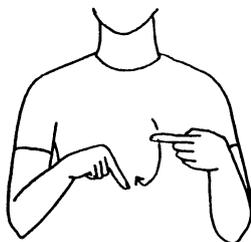
漢字手話「聖」



漢字手話「徳」



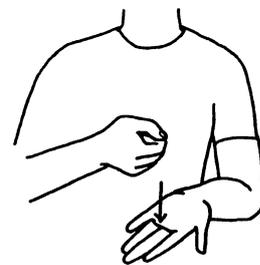
漢字手話「太」



漢字手話「子」

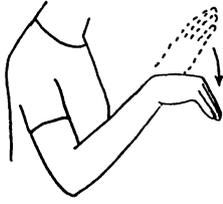


指文字「ガ」



漢字手話「定」

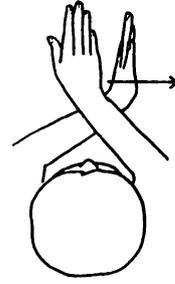
聖徳太子が定めた冠位十二階の制は、徳、仁、礼、信、義、智の6種をそれぞれ大小に分けて十二階としたものです。



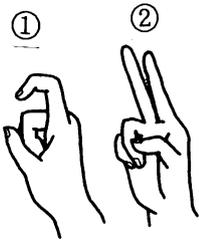
過去を表す手話「～た」



漢字手話「冠」



漢字手話「位」



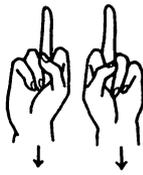
数字を表す手話「十二」



漢字手話「階」



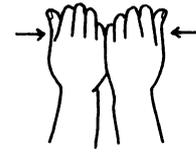
指文字「ノ」



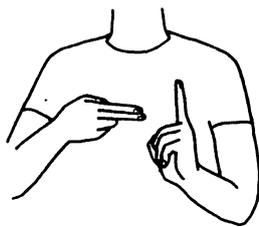
漢字手話「制」



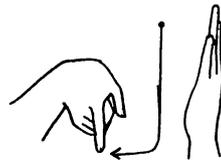
指文字「ハ」



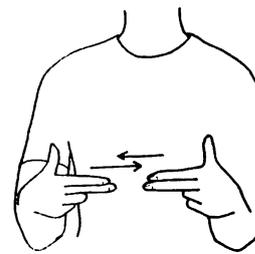
漢字手話「徳」



漢字手話「仁」



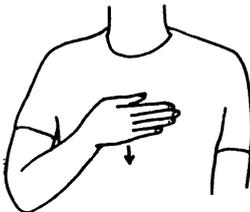
漢字手話「礼」



漢字手話「信」



漢字手話「義」



漢字手話「智」

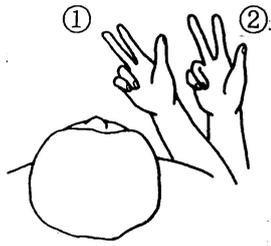


指文字「ノ」

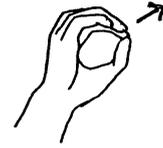
聖徳太子が定めた冠位十二階の制は、徳、仁、礼、信、義、智の6種をそれぞれ大小に分けて十二階としたものです。



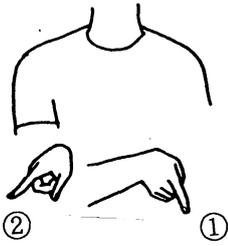
数字を表す手話「6」



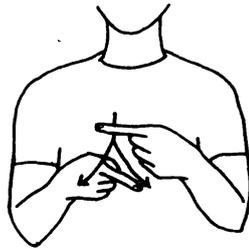
漢字手話「種」



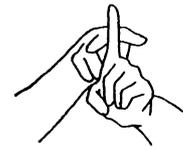
指文字「ヲ」



「それぞれ」



漢字手話「大」



漢字手話「小」



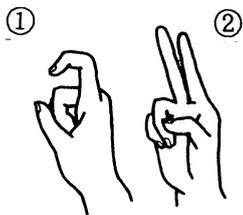
指文字「二」



漢字手話「分」



指文字「て」



数字を表す手話「十二」



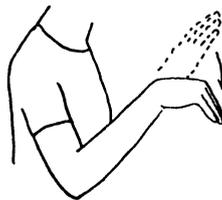
漢字手話「階」



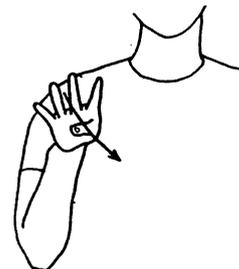
指文字「ト」



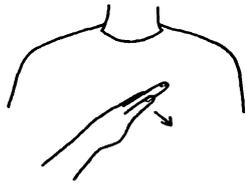
「する」



過去を表す手話「～た」



漢字手話「物」



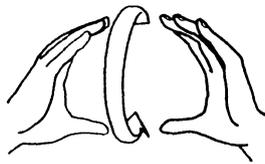
「です」

仁、義、信、智などは口の形だけでは区別しにくいものですが、日本語対应手話ではそれぞれの文字に対応する手話を用いることによって明瞭に区別できます。

\*抽象名詞「もの」は必ずしも漢字「物」を使用するとは限りませんが、漢字手話「物」をあててもよいものとします。

## (2) 社会生活の場

文例： 地球科学の急速な進歩にもかかわらず、素朴で根源的な疑問には  
今なお未解決なものが多い。 (読売新聞の記事より)



「地球」



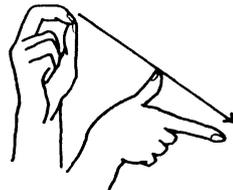
漢字手話「科」



漢字手話「学」



指文字「ニ」



「急速な」



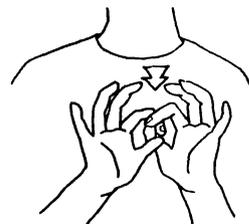
「進歩」



指文字「ニ」

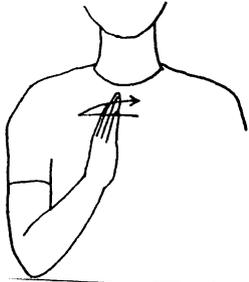


指文字「モ」

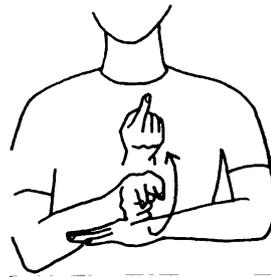


「かかわる」

地球科学の急速な進歩にもかかわらず、素朴で根源的な疑問には  
今なお未解決なものが多い。



否定を表す手話「ず」



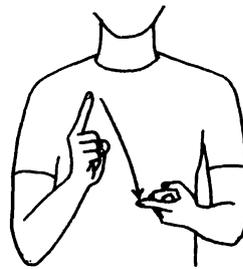
「素朴」



指文字「デ」



「根源」



漢字手話「的」

(な)



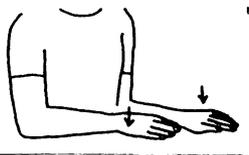
「疑問」



指文字「二」



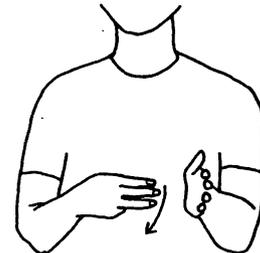
指文字「ハ」



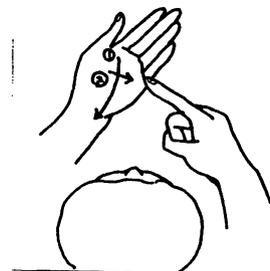
漢字手話「今」



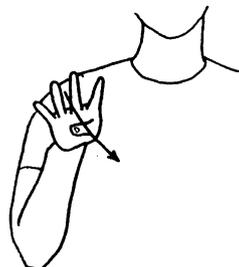
「なお」



漢字手話「未」



「解決」(な)



漢字手話「物」



指文字「ガ」

地球科学の急速な進歩にもかかわらず、素朴で根源的な疑問には  
今なお未解決なものが多い。



「素朴」、「根源的」などのような用語は従来の手話ではなかなか表しにくい  
ものですが、日本語対応手話では漢字または語に対応する手話を組み合わせること  
によって表現が可能となります。

## 第2章 日本語対応手話の表現

日本語を手話で表現するときの注意点を、品詞別に具体例をあげながら説明します。

### 第1節 名詞の種類と用法

日本語対応手話での名詞の表現についていくつかの場合に分けて説明します。  
ここでは特に注意を要する(1)固有名詞、(2)助数詞の表現について述べます。

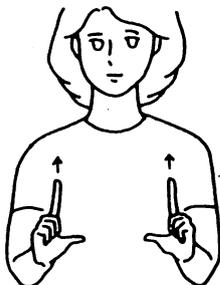
#### (1) 固有名詞 (地名・国名・人名)

##### 地名

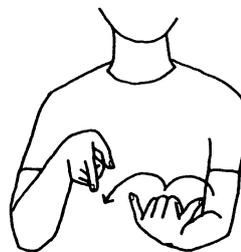
① 地名については、その土地で使われている地名表現を採用します。

例：「東京」

例：「つくば」



「東」(太陽が上る)を  
2回繰り返す

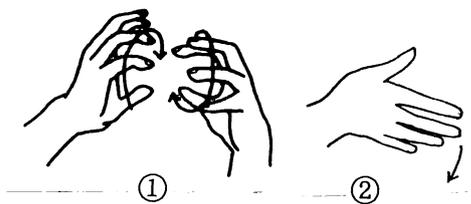


筑波山の男体山と  
女体山を示す

② 現地の地名の手話が不明なときやあまり知られていないときは、漢字手話の組み合わせで表現してもよいことにします。

例：岩手県

例：岩手の現地での手話



漢字手話「岩」と「手」の組み合わせ

岩手県出身の原敬首相の頭髪を示す

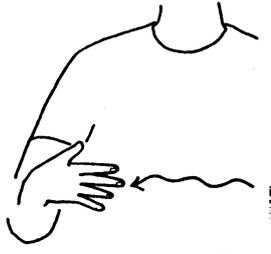
(岩手を表す手話は全国的には理解されにくいので、漢字手話の組み合わせで表してもよいこととします。)



## 国名

- ① 外国の国名については、既成手話で定着しているものはその手話で表現します。

例：アメリカ



アメリカ手話では別の形を使っている

例：イギリス



イギリス手話ではこの形を使っている

- ② 既成手話にない国名は、その国で使用している国名の手話を使います。

例：エチオピア



「エチオピア」の語源  
「日焼けして顔の黒い人」から

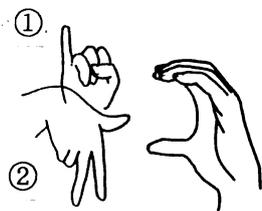
例：ケニア



ケニア国旗にある「勇気」の  
象徴の槍を示す

- ③ ①②で表せない国名については、左手で「世界」の手話の半分の形を示して国名のカテゴリーを表し、右手で国名の最初の1～2文字を表します。②の手話が通じにくい時は、この③の方法で表現してもよいこととします。

例：イスラエル



例：コスタリカ

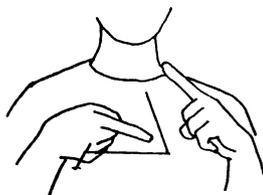


④ 国名の漢字部分は漢字手話の組み合わせで表現します。

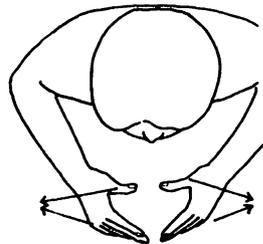
例：モナコ公国



モナコ



漢字手話「公」

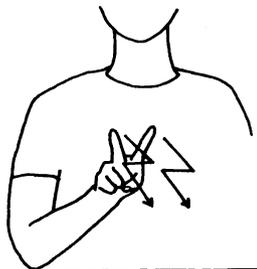


漢字手話「国」

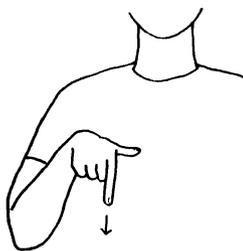
## 人名

漢字の人名については原則として漢字手話で表します。

例：竹下 登



漢字手話「竹」



漢字手話「下」



漢字手話「登」

ひらがなやカタカナの名は指文字で示します。

ただし、親しみをこめた愛称としてその人の特徴的なしぐさなどを表す手話を使ってもよいこととします。

例：水戸黄門



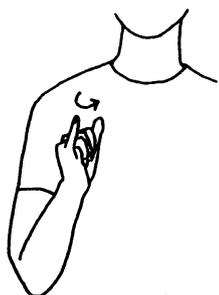
水戸黄門のあこひげを示す  
水戸の地名を表す現地での手話  
にも使われています。

(2) 助数詞

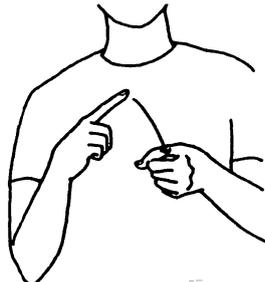
助数詞は独自の使い方をするものが多いので次のような原則でつくりました。

① 漢字手話をそのまま用いたもの

例：～人

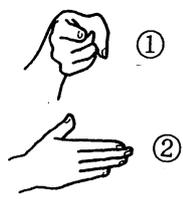


～年



② 漢字手話があるが、指文字または別途の手話にしたもの

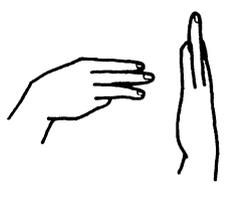
例：～足



～位



～階

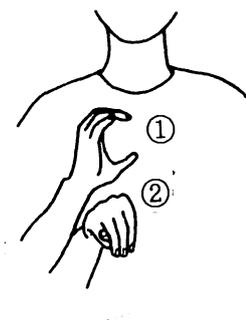


～軒

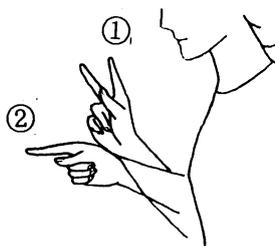


③ 外国の指文字を用いたもの

例：～cm



～kg



- ④ その他特別に作った手話  
例：マグニチュード

～CC



## 第2節 動詞の語尾変化の表現

### (1) 活用

動詞の活用は口形で表示し、手話では表現しないのが原則ですが、必要に応じて指文字で表します。ただし、名詞に「する」をつけて動詞化したものについては「する」の手話をつけます。

例：学習する



「学習」

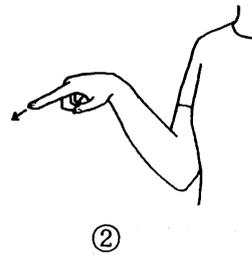


「する」

なお、命令形は動詞の手話に命令を表す手話をつけ加えます。

例：走る

例：走れ

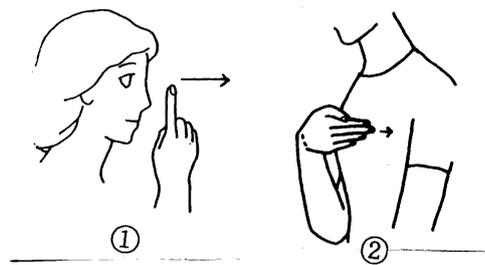
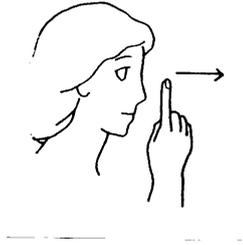


(2) 可能動詞

普通の動詞に対して可能動詞であることを表示したいときは「可能」の手話をつけます。

例：見る

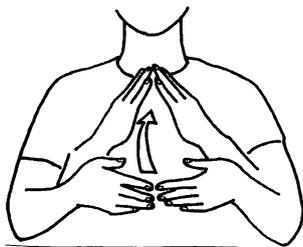
例：見える



(3) 自動詞と他動詞

自動詞と他動詞の区別は、原則として同じ手話で表現し、活用の違いは口形で区別します。

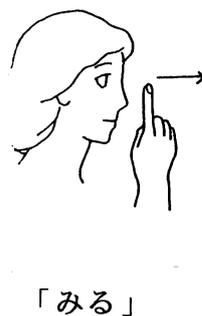
例：「建つ」（自動詞）と「建てる」（他動詞）



活用の違いは口形で区別しますが、必要なときは指文字で示します。

「歩いている」の「いる」や「食べてみる」の「みる」等の補助動詞は、元の動詞「居る」や「見る」の手話を用いてよいこととします。

例：「たべてみる」



### 第3節 形容詞と形容動詞

形容詞と形容動詞の活用変化は口形で表示し、手話では特に表示しません。

形容詞は「高かる／高く／高い／高い／高けれ」と活用変化し、活用語尾の母音が「A／U／I／I／E」と相違していますので、口形で十分読み取れますが、必要な場合には指文字で示します。

形容動詞も上記に準じます。

### 第4節 副詞

副詞は動詞・形容詞を修飾する語ですが、状態を表現する副詞と、話し手の仮定・推量・願望・疑問・否定・断定などの判断を表現する副詞との二種類があります。

従来の手話では、顔の表情や身体表現に依存する場合もありましたが、日本語対应手話ではすべての副詞をきちんと手話で表すようにします。

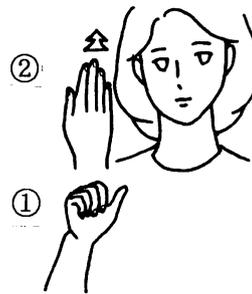
例：やがて



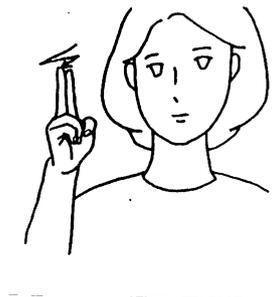
例：もし



例：あらかじめ



例：おそらく

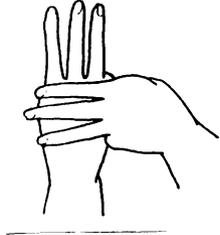


## 第5節 連体詞

連体詞の表現には次の4種類があります。

(1) 漢字手話をそのまま使うもの

例：「当（大学）」

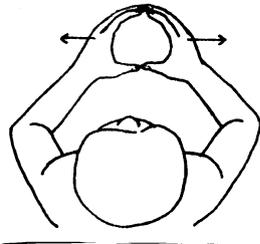


例：「前（校長）」



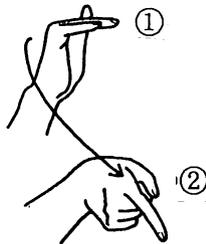
(2) 語幹が形容詞や動詞などと同じものは、その形容詞や動詞などの手話を用います。特に連体詞であることを明示したいときは指文字を添えます。

例：「大きな（家）」

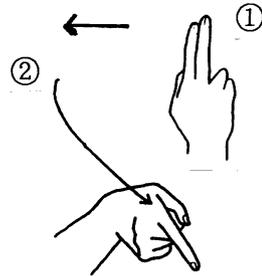


(3) 「この、その、あの、どの」などは独自に作ってあります。（代名詞「これ、それ、あれ、どれ」と関連させ、似た形にしてあります。）

例：「この」



例：「どの」

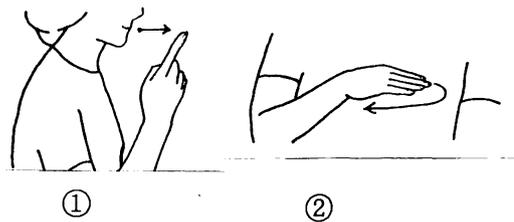


(4) 以上の他の、「あらゆる」「いわゆる」などの連体詞については独自に手話を作っています。

例：「あらゆる」



例：「いわゆる」



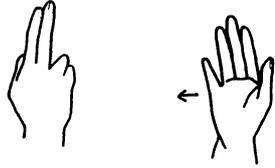
## 第6節 接続詞

接続詞の表記には次の6種類があります。

(1) 助詞と同じ場合は助詞の指文字または手話を用います。

例：「と」「で」は指文字

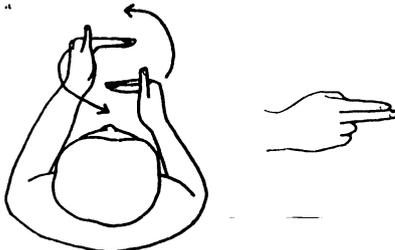
例：「けれども」



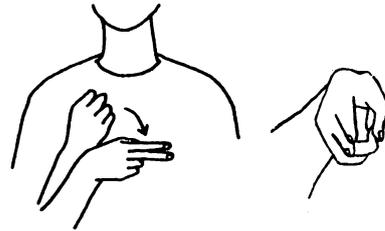
(2) 名詞に助詞がついた形になっている場合は「名詞+助詞」の形にします。

例：「さらに」

例：「または」



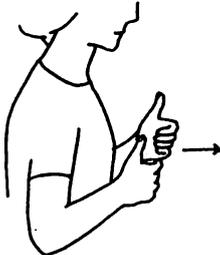
「さら」 + 「に」



「また」 + 「は」

(3) 動詞に助詞がついた形の場合は、「動詞+助詞」の形にします。

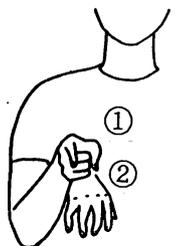
例：「従って」



「従う」 + 「て」

(4) 代名詞に助詞がついた形の場合は、「代名詞+助詞」の形にします。

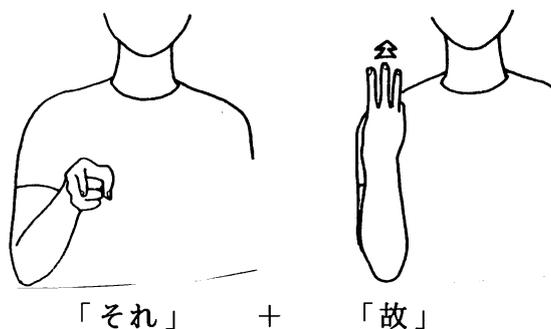
例：「そこで」



「そこ」 + 「て」

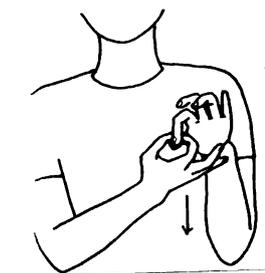
(5) 代名詞に名詞がついた形の場合は、「代名詞+名詞」の形にします。漢字手話が利用できる場合は漢字手話を用います。

例：「それ故」



(6) 上記以外のものは手話化しました。

例：「だから」

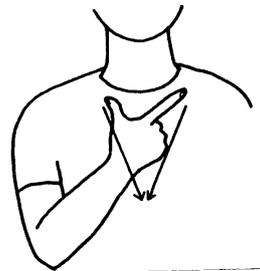
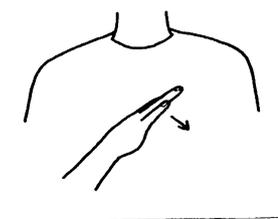


## 第7節 助動詞

助動詞は手話をつくります。活用の表示は口形によります。

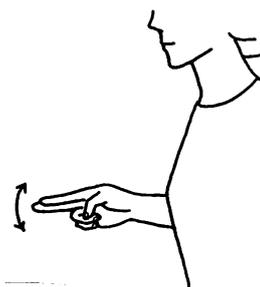
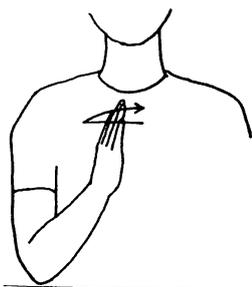
例：「だ」（断定）

例：「たい」（希望）



例：「ない」及び「ぬ」（否定）

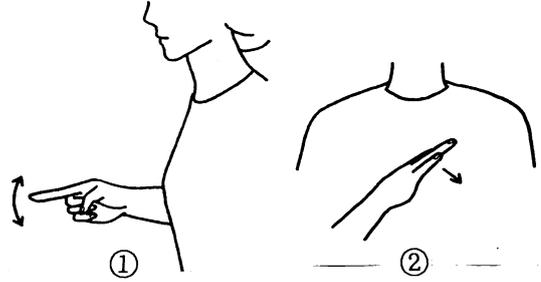
例：「らしい」（推量）



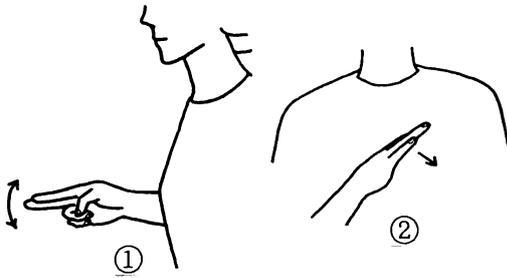
例：「た」（過去）



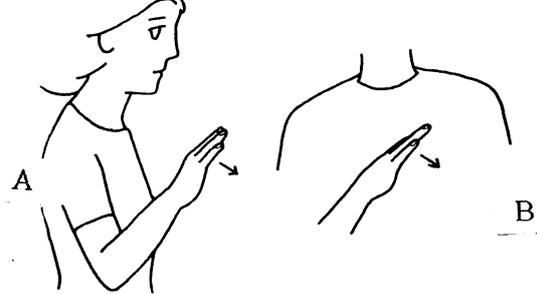
例：「そうだ」（伝聞）



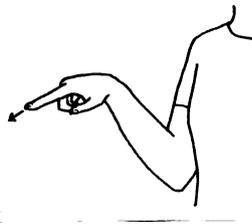
例：「ようだ」（比況）



例：「ます・です」（丁寧）



例：「せる・させる」（使役）



例：「れる・られる」（自発・可能・受身・尊敬）



例：「う、よう」（意志、推量）



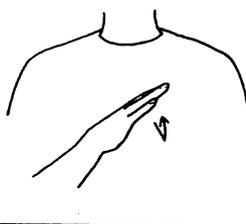
例：「まい」（打消の意志、推量）



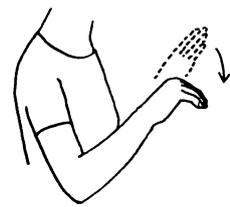
\*連続した助動詞の表現

連続して使われることの多い助動詞は次のように連続した動きとして示します。

例：「でしょう」



例：「ました」



## 第 8 節 助詞

1 音節の助詞は原則として指文字で表現します。

例：「が」



(わたし) 「が」

例：「は」



(あなた) 「は」

例：「と」



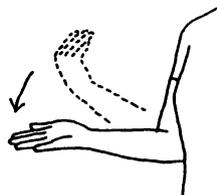
(本) 「と」 (雑誌)

例：「ね」



1 音節の助詞でも次の語は手話を使います。

例：「か(疑問)」



(あります) 「か」

例：「な(禁止)」



(やる) 「な」

2 音節以上の助詞は指文字または手話をつくります。

例：「から」



(経験) 「から」

例：「けれども」



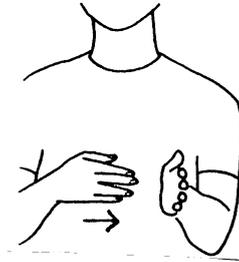
(だらしない) 「けれども」

例：「しか」



(一時間)「しか」(いない)

例：「まで」

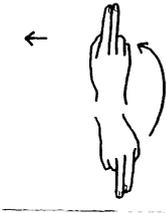


(12時過ぎ)「まで」

次のような助詞は指文字の連続で表します。

例：「など」(指文字の連続)

例：「のに」(指文字の連続)



(狎やコリー)「など」(の犬は)

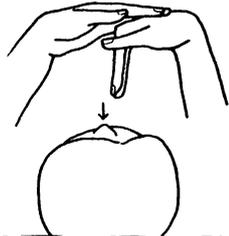


(勉強した)「のに」

# 第3章 日本語対应手話での表現

## 第1節 敬語の表し方

「奥様のご病気もすっかりよくなりましたとのこと、お慶び申し上げます。さて、この度の愚息の就職の件につきましては、大変丁寧なご配慮をいただきまして心より感謝申し上げます。おかげさまで本人も非常に満足しております。」



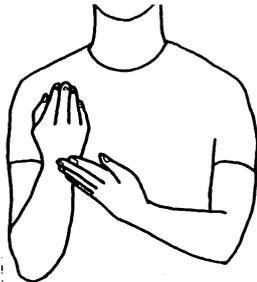
漢字手話「奥」



接辞手話「様」



指文字「ノ」



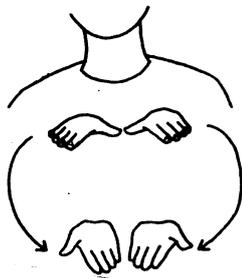
漢字手話「御」



「病気」



指文字「モ」



「すっかり」



「よく」



「なる」



尊敬「られる」



「た」



指文字「と」

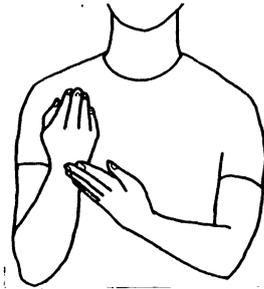
「奥様のご病気もすっかりよくなりましたとのこと、お慶び申し上げます。さて、この度の愚息の就職の件につきましては、大変丁寧なご配慮をいただきまして心より感謝申し上げます。おかげさまで本人も非常に満足しております。」



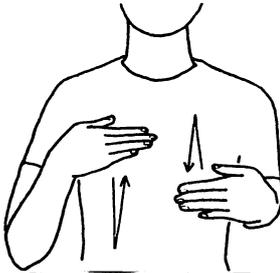
指文字「の」



「こと」



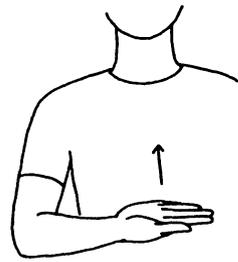
「お」



「よろこぶ」



「申し」



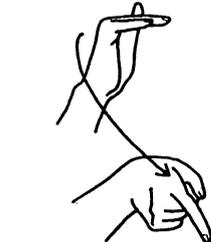
「あげる」



「ます」



「さて」



「この」



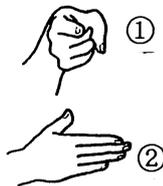
漢字手話「度」



指文字「ノ」



漢字手話「愚」



漢字手話「息」



指文字「ノ」



漢字手話「就」

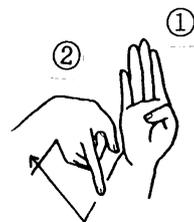
「奥様のご病気もすっかりよくなりましたとのこと、お慶び申し上げます。さて、この度の愚息の就職の件につきましては、大変丁寧なご配慮をいただきまして心より感謝申し上げます。おかげさまで本人も非常に満足しております。」



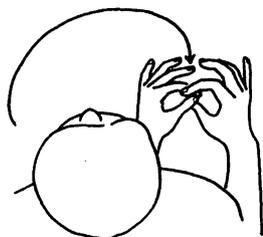
漢字手話「職」



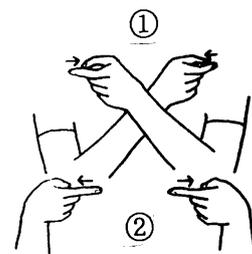
指文字「ノ」



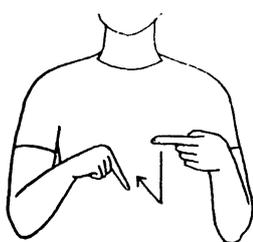
漢字手話「件」



「については」



「大変」



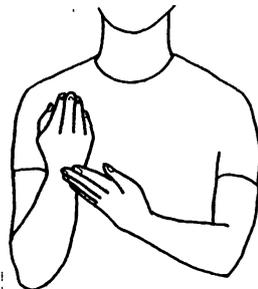
漢字手話「丁寧」



漢字手話「重」



指文字「ナ」



「ご」



漢字手話「配慮」



漢字手話「慮」



指文字「ヨ」

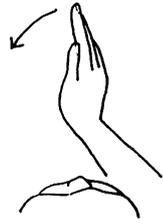


「いただく」

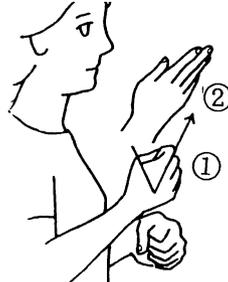


漢字手話「心」

「奥様のご病気もすっかりよくなりましたとのこと、お慶び申し上げます。さて、この度の愚息の就職の件につきましては、大変丁寧なご配慮をいただきまして心より感謝申し上げます。おかげさまで本人も非常に満足しております。」



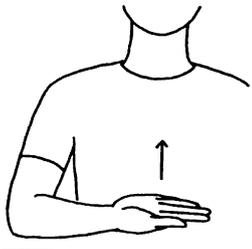
「より」



「感謝」



「申す」



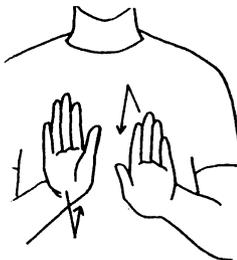
「あげる」



「ます」



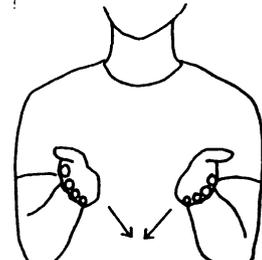
「おかげ」



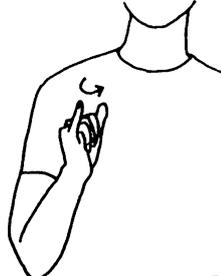
漢字手話「様」



指文字「テ」



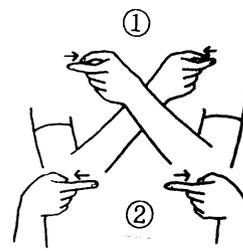
漢字手話「本」



漢字手話「人」



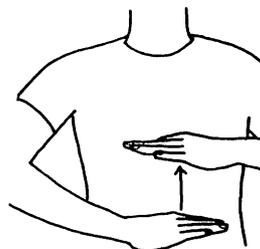
指文字「モ」



「非常」



指文字「ニ」



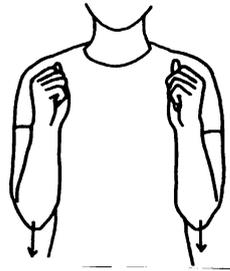
「満足」



「し」



「て」



「おり」



「ます」

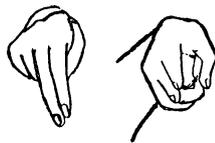
敬語では「お」や「ご」を付け加える例が非常に多くみられますが、手話で表現する際にはいちいち指文字で表すと手の動きが煩雑になりがちですので、特に表現したい場合以外は原則として省略します。

尊敬の助動詞「られる」は動詞に続けて表示します（受身の助動詞「られる」と同形）。

## 第2節 ニュースの表現

NHKが制作したHDTV（高品位テレビ）「ミューズ」は走査線1125ライン、16：9の横縦比率でアメリカの規格に適合するが、周波数帯域幅が広すぎるという問題がある。

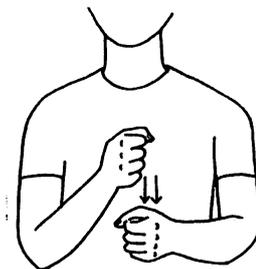
\*「NHK」、「HDTV」のようなアルファベットは、アメリカの指文字を使って表現します。手指で表すアルファベットということから、マニュアル・アルファベットと言われてています。



マニュアル・アルファベット「N、H、K」



指文字「ガ」



「制作」

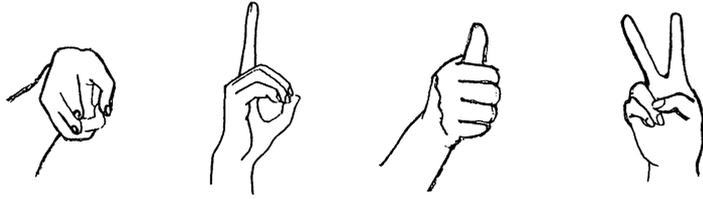


「する」

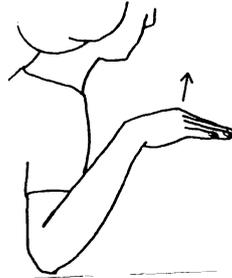


過去を表す手話「～た」

NHKが制作したHDTV（高品位テレビ）「ミュージズ」は走査線1125ライン16：9の横縦比率でアメリカの規格に適合するが、周波数帯域幅が広すぎるという問題がある。



マニュアル アルファベット「H・D・T・V」

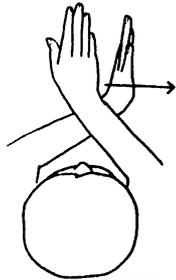


漢字手話「高」

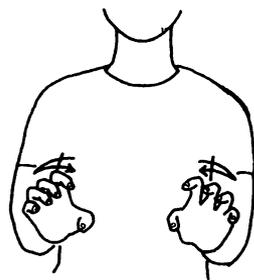


漢字手話「品」

(空書「(」)



漢字手話「位」



「テレビ」

(空書「)」)



指文字「ミュージズ」

(空書「「」)

(空書「」」)



指文字「ハ」

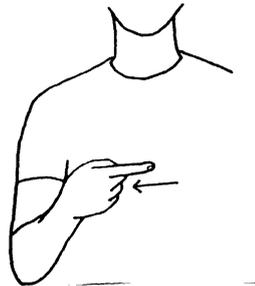


漢字手話「走」

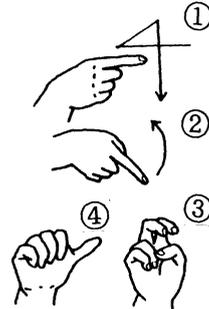


漢字手話「査」

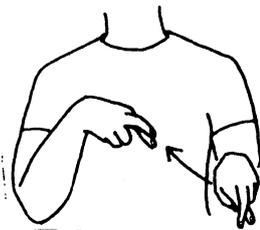
NHKが制作したHDTV（高品位テレビ）「ミュージ」は走査線1125ライン16:9の横縦比率でアメリカの規格に適合するが、周波数帯域幅が広すぎるという問題がある。



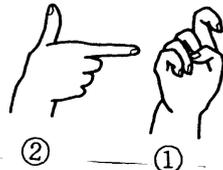
漢字手話「線」



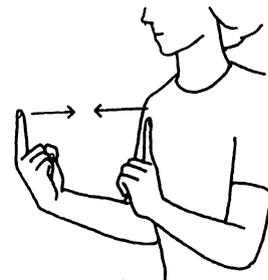
数字を表す手話「1125」



「ライン」



数字を表す手話「16」



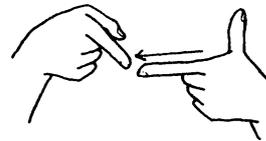
漢字手話「対」



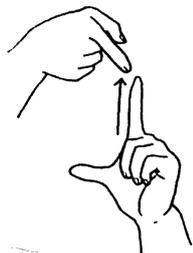
数字を表す手話「9」



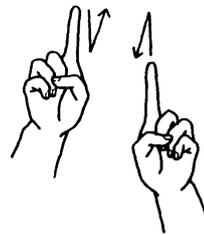
指文字「ノ」



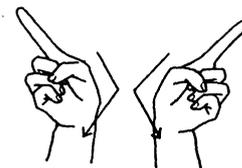
漢字手話「横」



漢字手話「縦」



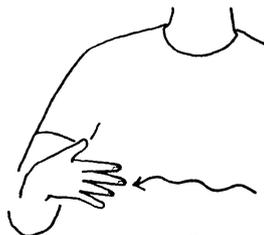
漢字手話「比」



漢字手話「率」



指文字「デ」

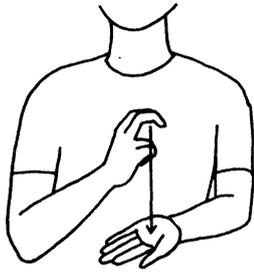


「アメリカ」



指文字「ノ」

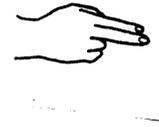
NHKが制作したHDTV（高品位テレビ）「ミューズ」は走査線1125ライン16：9の横縦比率でアメリカの規格に適合するが、周波数帯域幅が広すぎるという問題がある。



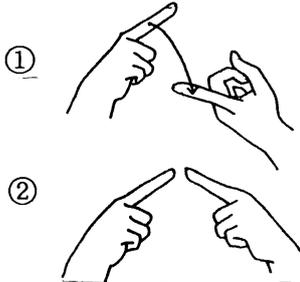
漢字手話「規」



漢字手話「格」



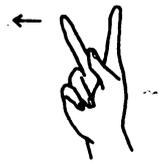
指文字「ニ」



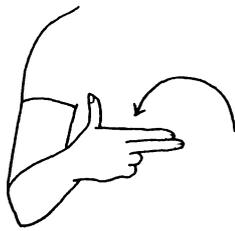
「適合」



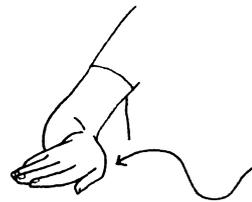
「する」



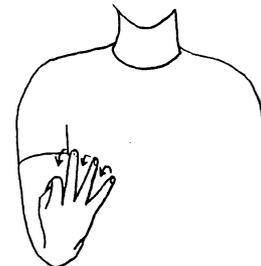
指文字「ガ」



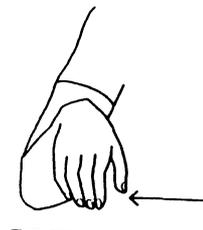
漢字手話「周」



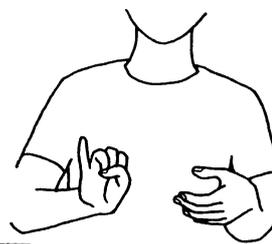
漢字手話「波」



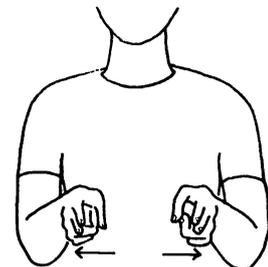
漢字手話「数」



漢字手話「帯」



漢字手話「域」



漢字手話「幅」



指文字「ガ」



漢字手話「広」



「すぎる」



指文字「ト」



「いう」



「問題」



指文字「ガ」



「ある」

時代とともに新しい用語が用いられるようになります。日本語対应手話は漢字手話の組み合わせによってこのような語も表示することができ、新しい時代の言語生活に対応できます。

### 第3節 会話文の表現

マツオ「キリコさん、こんにちは」

キリコ「先生、どこにいらっしゃるのですか」

マツオ「今度フランスにいくので千葉市にパスポートを申請にいくのですよ」

キリコ「いいですね。私なんか予備校に模擬試験を受けに行くんです」

マツオ「あの予備校はじゅんさい池公園の近くですね。きのう行ったら桜やすみ  
れがきれいで、あひるもいましたよ」

キリコ「もう春ですね。予備校はやめてその公園に遊びに行くことにします」

会話の場合でも、日本語対应手話を用いる場合は、基本的にはこれまでに述べてきた原則に従いますが、自然な会話ができることが大切ですので、円滑化をはかるために、相手に対する呼びかけや助詞などは省略してもよいこととします。省略しても差し支えないと思われる手話については、次のように( )でくくって示します。

相手と自分との関係や会話の内容など、その時と場合に応じて、自然で楽しい会話ができるように各自で工夫しながら表現してみてください。

マツオ「キリコさん、こんにちは」



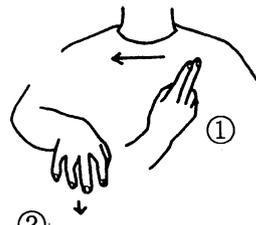
指文字「キ・リ・コ」

(「さん」)



「こんにちは」

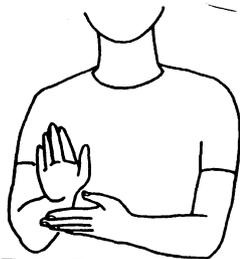
キリコ「先生、どこにいらっしゃるのですか」



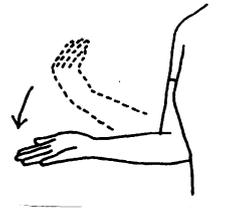
(「先生」)

「どこ」

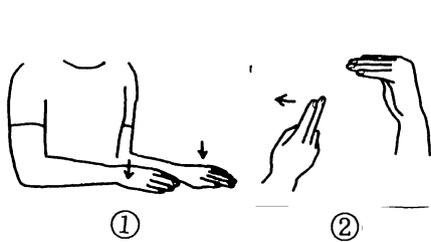
(指文字「へ」)



「いらっしゃる」(指文字「ノ」)(「です」) 疑問の手話「か」



マツオ「今度フランスに行くので千葉市にパスポートを申請に行くのですよ」



「今度」

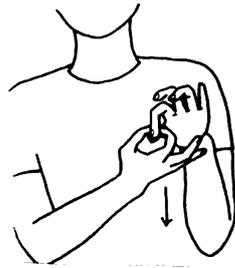


「フランス」

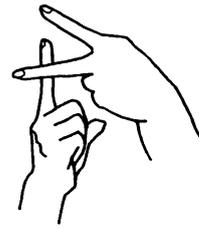
(指文字「ニ」)



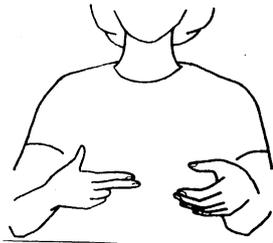
「行く」



「ので」



「千葉」



指文字結合手話「市」

(指文字「ニ」)



「パスポート」

(指文字「ヲ」)



「申請」

(指文字「ニ」)



「行く」

(指文字「ノ」)

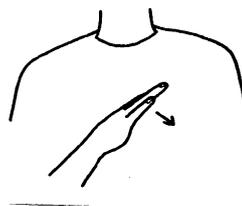
(「です」)

(指文字「ヨ」)

キリコ「いいですね。私なんか予備校に模擬試験を受けにいくんです」



「いい」



「です」



指文字「ネ」

(手の形が同じなので、つながった形で表現してもよい)



「わたし」



①

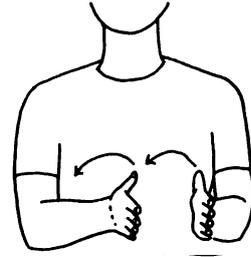


②



③

「なんか」

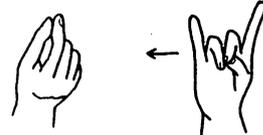


「予備」



漢字手話「校」

(指文字「ニ」)

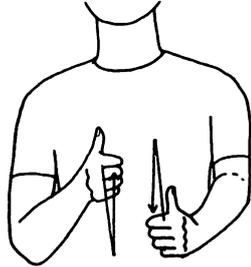


①



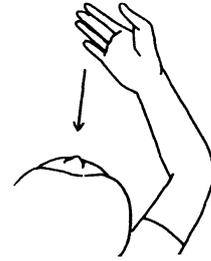
②

「模擬」



「試験」

(指文字「ヲ」)

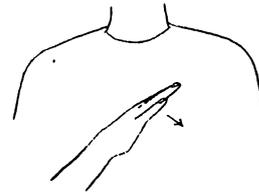


「受ける」

(指文字「ニ」)

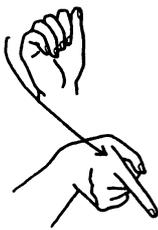


「いく」

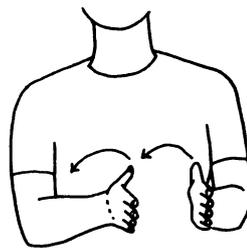


(ん)「です」

マツオ「あの予備校はじゅんさい池公園の近くですね。きのう行ったら桜やすみれがきれいで、あひるもいましたよ」



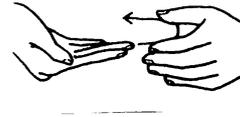
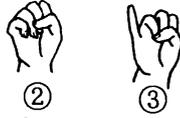
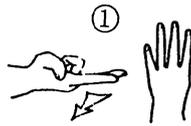
「あの」



「予備」



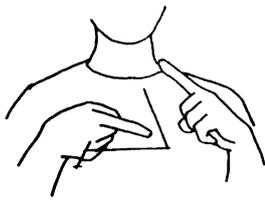
漢字手話「校」



(指文字「ハ」)

指文字結合手話「じゅんさい」

漢字手話「池」



漢字手話「公」

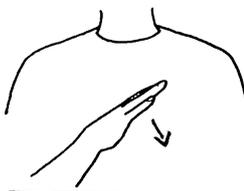


漢字手話「園」

(指文字「ノ」)



「近く」



「です」

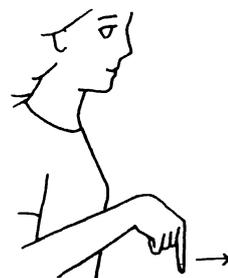
～



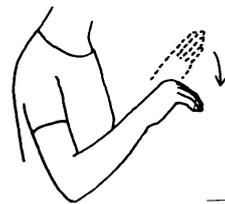
指文字「ネ」



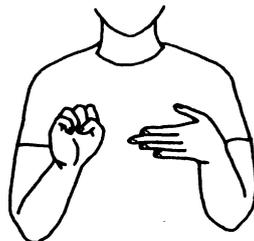
「きのう」



「行く」



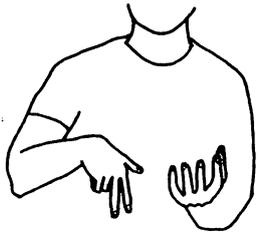
過去の手話「～た」



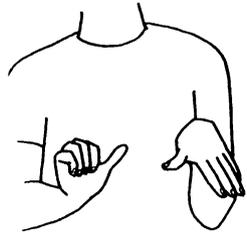
(指文字「ら」)

指文字結合手話「桜」

(指文字「ヤ」)



指文字結合手話「すみれ」(指文字「ガ」) 「きれい」(指文字「デ」)



指文字結合手話「あひる」 (指文字「モ」)



「いる」

(「ます」)

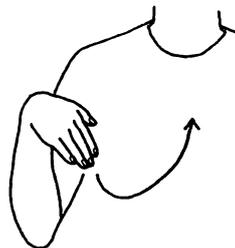
(過去の手話「～た」)

(指文字「ヨ」)

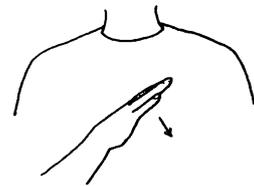
キリコ「もう春ですね。予備校はやめてその公園に遊びに行くことにします。」



「もう」



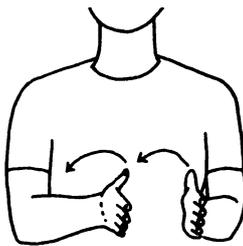
漢字手話「春」



「です」 ～



指文字「ネ」



「予備」

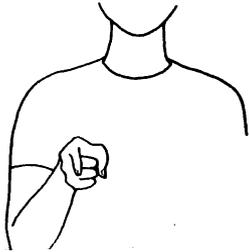


漢字手話「校」

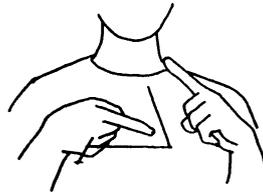


「やめる」

(指文字「テ」)



「その」



漢字手話「公」



漢字手話「園」



「遊び」

(指文字「ニ」)

(指文字「ニ」)



「行く」

(「こと」)

(指文字「ニ」)



「する」

(「ます」)

本研究は手話コミュニケーション研究会がトヨタ財団の  
研究助成を受けて行なっている研究成果の一部です。

「日本語対応『手話辞典』編纂作成のための総合研究」

1985年度（助成番号85-Ⅲ-016）